



TITLE:

# ナチス革命前に於ける獨逸の社會費 - 「社會政策の危機」の一検討 -

AUTHOR(S):

中川, 與之助

---

CITATION:

中川, 與之助. ナチス革命前に於ける獨逸の社會費 - 「社會政策の危機」の一検討 -. 經濟論叢 1936, 42(3): 583-604

ISSUE DATE:

1936-03-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/130750>

RIGHT:

# 東京帝國大學經濟學會 經濟叢論

第 三 號      第 四 十 二 卷

昭和十一年三月一日發行

## 論 叢

宗教團體と課税

法學博士 神戸正雄

勞銀理論の破綻

文學博士 高田保馬

税制整理の目標

經濟學博士 汐見三郎

## 時 論

資金の活動に於ける重複性

經濟學博士 小島昌太郎

經濟更生論

經濟學博士 蜷川虎三

## 研 究

ナチス革命前に於ける獨逸の社會費

經濟學士 中川與之助

私設工場委員會の構造形態

經濟學士 大塚一朗

中立貨幣政策に就いて

經濟學士 中谷 實

## 說 苑

企業の立場からする市場の研究

經濟學士 祭原光太郎

## 附 録

新着外國經濟雜誌主要論題

# ナチス革命前に於ける獨逸の社會費

——「社會政策の危機」の一検討——

中川與之助

## 序　　言

私は先に廣義の獨逸社會事業には保險 (Versicherung)・給助 (Versorgung)・救護 (Fürsorge) の三様式のあることを明にして置いた。茲ではこの社會事業がナチス革命前に如何なる状態にあつたかを主として財政的方面より考察してみたい。獨逸ではこれら社會目的のための經費を社會費 (Sozialaufwand) 或は社會負擔 (Soziallasten) とよんでゐる。従つて本稿はナチス革命前の社會費或は社會負擔の研究である。ナチス革命前には「社會政策の危機」が叫ばれ、ナチスは社會民主々義的社會政策に眞向から反對して起つた。何が「社會政策の危機」であり、何がかゝる急角度の政策の轉換を要求したのであるか？吾人が敢て検討を試みんとする所以である。

本研究に於て私はナチス革命五ヶ年間の統計資料に據つた。一九三三年一月にナチスに政權が移れるにより、従つてそれは一九二八年から三二年間の事情である。五ヶ年をとれる所以はナチス革命の二三年前のみにては變動が餘りに甚しく、一般的傾向をみるには更にその二三年までに

溯るを適當と考へたるによる。統計上屢々一九一三年の數字を掲げたのは戦前との比較に資せんが爲であるが、戦前と戦後とには貨幣價值の變動があるが故に、勿論そのまゝ比較することは正しくない。ビュロー氏は同様の研究に於て戦前の數字を一・五倍して戦後の貨幣價值に換算してゐるが、その根據に就ても検討を要するものがあらうと思はれるので、私の場合戦前に於ける數字は戦前に於ける種々の數字間の比較の爲に主として利用した。本稿の統計資料は専ら「獨逸統計年鑑」から、即ち社會保險に關するものは同年鑑第十三項保險及び第十四部の財政から、又、給助費・救護費に關するものは同じく右の財政部から之を得た。私の研究は社會保險から始つて給助費・救護費に及ぶが、社會保險の中、失業保險の取扱に就て一言を要する。社會保險の部に於て失業保險が除かれてある。それは次の理由による。失業保險は失業者の激増して來るにつれてその經營が破綻し他の失業救濟事業の經營と一緒にされてしまつたので、固有の失業保險のみの經營はなくなつた。統計上には失業保險の欄が存置するも、その内容をみれば明なる如く、他の失業救濟事業との合同會計であり、例へばその収入の中國家負擔をみてもそれは失業保險に對する國家負擔のみでなく、多くの失業救濟費を含むのである。況んやその支出をみれば一體となつて居て失業保險のみの支出といふものはありえない。強いてこの合同會計を失業保險と見做したならば、統計的内容の異なる他の社會保險の事情を無視することとなる。之を避くべきであらう。現に獨逸統計年鑑も失業保險をば全社會保險概覽の統計からは一九三〇年以後除いてゐる。

2) Adolf v. Bülow の論文 Die Höhe des Sozialaufwandes in Deutschland 參考  
(Der wirtschaftliche wert der sozialpolitik 1931. S. 55-78)

# 第一 社會保險費

(甲)全社會保險の收支狀態 吾人は先づ全社會保險即ち疾病・傷害・廢疾・使用人・鑛夫の各保險の收支關係及び狀態をみるために第一表を掲げる。

第一表 一九一三・一九二八―三二年に於ける社會保險の收支狀態(單位百萬馬)

保 險 名	收 支 狀 態	一 九 一 三	一 九 二 八	一 九 二 九	一 九 三 〇	一 九 三 一	一 九 三 二
疾 病	差 總 總 引 支 收 入 出 入	六七〇、九 五九二、二 一〇一、七	二二四、七 二〇五、二 一九、五	二二三、四 二二九、三 一〇、一	二二九、九 二〇〇、〇 二九、九	一六二〇、六 一六六、四 五五、八	一三三、六 一三二、八 一六、八
傷 害	差 總 總 引 支 收 入 出 入	三三三、三 三三六、八 二、五	三九五、九 三七七、五 一八、四	四二八、九 四〇〇、七 二八、二	四三三、三 四二九、二 五、九	三八九、一 四二〇、一 三、〇	三三〇、七 三三三、〇 二、三
廢 疾	差 總 總 引 支 收 入 出 入	四一九、三 二四三、〇 一七六、三	一五三、一 一二六、二 三九五、九	一六二、七 一三三、三 三〇四、四	一五〇、〇 一四七、五 五、六	一三三、四 一五二、九 一八五、四	一〇四、一 二八八、八 一八四、七
使 用 人	差 總 總 引 支 收 入 出 入	一四一、七 一四、七 一二七、〇	四〇六、五 二三八、二 二六八、三	四九五、九 一八六、二 三〇九、七	五四七、八 二三四、八 三三三、〇	五三、一 二六、一 二六、〇	四四六、四 二六五、六 一八〇、八
鑛 夫	差 總 總 引 支 收 入 出 入	九二、五 四六、八 四五、七	二二〇、四 二二六、八 三六、四	二六二、〇 二二一、九 三〇、一	二〇一、一 二四〇、四 三八、三	二〇一、九 二二五、九 二四、〇	二〇〇、一 二〇〇、八 〇、七
總 計	差 總 總 引 支 收 入 出 入	一五三、七 一〇〇、五 四三三、二	四六九、六 三九一九、九 七七九、七	五一三、八 四三七、二 七六六、五	四八三、一 四三七、八 四六三、三	四〇五、九 四〇九、三 三六、二	三三二、五 三三〇、〇 二、五

右をみるに、戦前に於ける全社會保險の收入總額は約十五億五千萬馬、支出總額約十一億馬であるが、ナチス革命前五ヶ年に於ては、一九三二年の三十三億馬を最少として、何れも四十億馬を上下してゐる。五ヶ年間の變遷をみるに、收入に於ては一九二九年の五十一億馬が最高にしてその後は漸落し、支出にありては一九三〇年が最高を示してその額が約四十四億馬、これもその後は漸減してゐる。收支が一九二九年或は三〇年を絶頂として、その後何れも減退してゐるのは、世界恐慌の打撃が獨逸經濟を益々苦境に陥らしめ、ために社會保險の收入が減少したるが故に、やむなく支出もそれに應じて節減せられざるをえなくなれるによる。しかも收入の減少に均衡して支出を減することが出来なかつたので、果然、總計に於ては一九三一年に三六、二百萬馬といふ赤字を出してゐる。一九三二年に再び一一、九百萬馬の黒字を出してゐるが、それは疾病・癱疾保險に於ける支出の大緊縮の結果である。保險財政の建て直りの結果なりと斷じてはならぬ。前年度と同額の支出をなしてゐたならば一九三二年には更に更に莫大の赤字を出したであらう。更に翻つて年々の收入差引額に徴しても統計の示す如く剩餘は逐年減少する一方である。社會保險に於ける收支狀態の惡化は、全保險に就ても右の如く明であるが、各個別にみれば更に一層明にされうる。

先づ收入をみるに、その絶對額は疾病・傷害・癱疾・鑛夫各保險は一九二九年以來、使用人保險も一九三〇年以來各々逐年減少する一方である。收入がかく減少してゐるのに他方支出をみれば、

絶對額に於ても寧ろ増加してゐる場合が多い。即ち一九二九年までは疾病・傷害・鑛夫各保險に於て三〇年までは使用人保險に於て遞増してゐる。例へ絶對的には増加してゐないにしても、收入に比して相對的に減少してゐないがために、一九三〇年以來は各保險に於て赤字が頻出してゐる。表の示す如く一九三〇年に至りては傷害・鑛夫の二保險が、三一年には僅に使用人保險を除けば、他の四保險が全部赤字を出すに至つたのである。三二年に入りて赤字は三保險に止まる様になつたが、疾病保險の如きは辛うじて赤字を免れたといふ程度であり、他の諸保險にありては悉く支出に一大斧鋏の加へられたる跡歴然たるものがある。しかもその中にありて癈疾保險に於ける莫大の赤字の如き如何ともすべき術がなかつたのである。即ち一九三二年に至り各社會保險の財政的内容は毫もよくなつてゐない。

(乙) 社會保險に於ける各種收入の狀態 社會保險の收入は私人の掛金、統計に所謂「負擔金」(Beiträge) 及び「國家の負擔や補助」(Reichszuschuss und beitrage)、並びに「利子ノ他」の收入からなつてゐるが、後に示す如く、私的負擔金が中樞的收入をなし、その他のものはその收入に於ける地位からみれば補助的・副次的のものである。社會保險の財政に於けるこの中樞的收入が、しからばナチス革命前に如何様に發展してゐたか、第二表は之を語るであらう。

社會保險全部に就て即ちその總計をみるに、負擔金收入が、一九一三年には總收入の八三・四%を、ナチス革命前の五ヶ年には約して八八%、八四%、八三%、六七%となつてゐる。この百

第二表

一九一三・一九二八―三二年に於ける社會保險の負擔金收入の地位  
(絶對額<sup>\*</sup>及び收入總額に對する百分率)<sup>\*</sup>單位百萬馬

疾病 〔絶對額 %〕	傷害 〔絶對額 %〕	療疾 〔絶對額 %〕	使用人 〔絶對額 %〕	礦夫 〔絶對額 %〕	總計 〔絶對額 %〕
一九一三	一九二八	一九二九	一九三〇	一九三一	一九三二
五五五、九 八八・八	二七四、三 九六・六	三三四、二 九六・五	二〇五、九 九六・〇	一五三、七 九五・一	二六九、一 九五・〇
一九四、七 八五・一	三七七、四 九五・二	四〇六、三 九四・四	四〇四、三 九五・五	三七〇、〇 九三・一	三〇〇、二 九三・七
二九〇、〇 六九・二	一〇七五、八 六九・九	一〇九二、〇 六七・〇	九八六、三 六四・四	八一九、二 六一・四	六四二、二 五八・三
二三八、一 九七・一	三七七、二 七七・九	三七二、四 七五・二	三八五、二 七〇・二	三三三、五 六五・八	二八七、七 六四・六
七七一、一 八三・二	二二二、一 九六・四	一九二、三 七三・三	一五二、五 七四・八	一二〇、七 五九・九	九三、二 四六・五
二二五、八 八三・四	四〇六、八 八六・五	四三〇、二 八三・八	三九八、二 八三・二	三二六、一 七六・四	二五三、四 七五・四

分率をみて第一にその收入に於ける地位の重要さを知りうるであらうが、更に人はかくの如き中樞的收入が今みる如く、一九二八年以來逐年減少の傾向を辿つて來てゐることを見遁しはせぬであらう。いふまでもなくそれは獨逸經濟の惡化につれて負擔金收入が減少していつたことを示すものである。

今之を各保險別に觀察せう。殆ど全保險に於て負擔金收入の絶對額が逐年激減してゐる。之を



總收入に對する百分率に照しても亦同様の結果を示す。試みに一九二八年と三二年とを比較して、最も顯著な低落を示してゐるものをあげれば、鑛夫保險は九六・四%から四六・五%に、癱疾保險は六九・九%から五八・三%に、使用人保險は七七・九%から六四・六%に下つてゐる。社會保險殊に癱疾・使用人・鑛夫保險等の經營に一大動搖を來してゐたことが察知しうるのである。

中樞的收入たる負擔金收入が上述の如く激減していつたとすれば、他の收入が如何に動いていつたか、果してこの收入の缺陷を補填しえたであらうか、「利子ソノ他」をみるために、先づ社會保險に於ける年度末財産狀態を檢せう。

第三表 一九一三・一九二八・三二年に於ける社會保險の年度末財産狀態 (單位百萬馬)

保 險 名	一九一三	一九二八	一九二九	一九三〇	一九三一	一九三二
疾 病 傷 害	四九八	七二、三	八三、六	九五、九	八八、五	八九、一
癱 疾	五九七、九	二九六、八	三二四、七	三〇八、八	二七七、一	二七四、三
使 用 人	二〇二五、五	二七七、六	一五八二、一	一六三六、七	一五二、三	一六六、六
鑛 夫	一七一、一	一〇〇〇、六	一三二〇、三	一六三三、三	一八九三、三	二〇九、一
總 計	三二八、三	三三九二、〇	四二〇六、二	四六七八、九	四六三三、四	四六七〇、六

全社會保險に於ける年度末財産總計は、一九二八年が約三十四億馬、二九年が約四十二億で約八億馬ばかりの増加を示したが、爾來三二年に至る三ヶ年は四十六億臺に止つて何等の發展をみせぬ。加之、使用人保險を除けば一九三〇年以來各保險に於て財産が寧ろ減少してゐる。財政困

難のために年々財産を喰ひ込んでいつたものと考へられる。事態かくの如しとすれば、社會保險が財産收入に殆ど何等期待するをえなくなつてゐたことは明白である。年度末財産状態はかくの如しとして、一體「利子ソノ他」収入は全收入にありて如何程の重要さを有つてゐたであらうか、これは社會保險に他のもう一つの副次的收入即ち國家負擔金及び補助―表では二つを併せて「國家負擔」をなす―と併せ觀察するを便となすが故に、次表に二者を並べて掲げることとする。

第四表

一九一三・一九二八―三二年間の社會保險に於ける國家負擔及び利子その他收入の地位  
(絶對額及び收入總額に對する百分率)

\*單位百萬馬

	一九一三	一九二八	一九二九	一九三〇	一九三一	一九三二
疾病	絶對額 七五、〇	絶對額 三九、〇	絶對額 二七、二	絶對額 三〇、〇	絶對額 七五、二	絶對額 六〇、八
	% 二・三	% 一・四	% 一・三	% 一・〇	% 一・七	% 〇・〇
傷害	絶對額 三四、六	絶對額 一八、五	絶對額 二二、六	絶對額 四・五	絶對額 一九、一	絶對額 二〇、五
	% 四・九	% 四・八	% 三・六	% 一・五	% 四・九	% 六・三
療疾	絶對額 五、五	絶對額 三〇、三	絶對額 三九、三	絶對額 二九、一	絶對額 四八、三	絶對額 三八、四
	% 一・〇	% 二・〇	% 三・〇	% 一・一	% 三・三	% 五・〇
使用人	絶對額 七、八	絶對額 二六、〇	絶對額 一四、四	絶對額 八・九	絶對額 九六、九	絶對額 七五、五
	% 一・六	% 八・一	% 四・四	% 三・五	% 七・五	% 六・七
鑛夫	絶對額 三、六	絶對額 八、九	絶對額 二二、五	絶對額 二四、八	絶對額 一七九、六	絶對額 一五八、七
	% 〇・八	% 二・三	% 三・五	% 三・八	% 四・二	% 三・五
總計	絶對額 一九、四	絶對額 三九、三	絶對額 五八、〇	絶對額 六九、九	絶對額 四八七、七	絶對額 三三三、七
	% 二・八	% 六・一	% 五・八	% 六・九	% 九・六	% 一〇・五

先づ「利子ソノ他」収入の地位から考察せんに、この「利子ソノ他」収入は勿論全部が財産收入で

はないが、利子収入がその重要部分を占めてゐるものと推定されるし、若しかりに主要部分を占めぬものとすれば、利子収入従つて又財産収入の地位は表中にあらはれしものより更に小さいものとなるわけである。右の表の總計欄をみる。戦前一九一三年には總収入に對して國家負擔が三八%、「利子ソノ他」は一二・八%であり、後者の地位は前者を遙かに凌駕してゐる。然るに、一九二八年以後の五ヶ年をみると、五・六%、七・二%、九・二%、七・五%、六・四%、と變移し、平均すれば七・二%となるのである。吾人は之によりて利子及び「ソノ他」収入の地位の小さいこと、並びにその地位が殆ど増大してゐないことを知らねばならぬ。而してこのことは、恰も前掲第三表でみたる如き年度末財産の狀況と符節を合するものである。

「利子ソノ他」収入の地位は上の如し。吾人は進んで國家負擔の收入上の地位、従つて又國家負擔の増減如何を検討してみやう。然るにこの方は「利子ソノ他」収入と大いに異なるのである。先づ全保險に就て總括的に之をみるに、戦前には總収入の三・八%に過ぎざりしものが、一九二八年には七・四%、爾來三二年までには、九・三%、一〇・二%、一二・〇%、一四・一%と進み、五ヶ年を平均すると一〇・六%である。しかもその率は逐年増加する一方であり、三二年には激増振りを示してゐる有様である。之を絶對額にみるも、一九二八年にはその額約三億五千萬馬であつたが三年には四億約八千萬馬に上つてゐる。社會保險の經營が益々絶對的にも相對的にも國庫の負擔を増加していつたことを知りうるであらう。

更に吾人は「利子ソノ他」収入と國家負擔の二收入を各保險別に一瞥するならば、前者は戦前一九一三年には癱疾・鑛夫保險に於て約一七%を、疾病保險では一一%を占めてゐたるものなるが、ナチス革命の直前には何れも著しく低下して八%以上のものをみないのである。この中にありて唯使用人保險のみは例外をなし、逐年その率を増加してゐる。次に後者即ち國家負擔を各保險別に眺むれば、戦前には僅に癱疾保險のみにこれありしものが、戦後には疾病・癱疾・鑛夫の各保險に及び、その割合も一九三二年には鑛夫保險に於て四五・五%、癱疾保險に於て三・五〇%を示してゐる而して殆ど凡て一九三〇年以後はその率を急に高めてゐることも注意すべきである。

以上、社會保險の收入狀態に就て吾人の觀察したる所を要括すれば、ナチス革命前に於ては(1)社會保險の收入は大部分私的負擔金からなり立つてゐたのであるが、その絶對額は逐年減少したるのみならず、全收入に於ける百分率も逐年低下の傾向を辿つていつた。個別的にいへば癱疾・使用人鑛夫の各保險に於てその低下率が甚しい。(2)「利子ソノ他」収入は戦前に比して甚しくその地位を低め、大勢からみてそれに何等の期待をかけざる狀態に至つてゐた。保險別にいへば癱疾・鑛夫・疾病保險に於てその低下が著しい。(3)「國家負擔」収入は以上の二者と異り、收入に於けるその割合を逐年高めて行つた。殊にナチス革命の二三年前からそれが激増してゐる。個別的にいへば鑛夫・癱疾保險に於ける割合は躍進的增加を示してゐる。要するに他の收入の地位の減じただけ國家負擔の割合が増加したことになる。之を絶對額にみるも國家負擔額が全社會保險に於て

一九三二年には二八年の約一倍四分の増加である。國家負擔の増加は國家財政の壓迫となり、國家財政の壓迫は國民の從つて又產業上の負擔とならざるをえない。社會保險がナチス革命前に於ける國家財政及び國民經濟上の癌となつてゐたことは疑ふべくもない。

(丙)社會保險の支出狀態 社會保險の支出はその性質上推量せられうるが如く、大部分は被保險者への給付に充てられて居り、他は保險の行政費である。然らばナチス革命前にその給付高は如何程の額に及んでゐたか、吾人は左表にその絶對額及び總支出に對する百分率を掲げる。

第五表 一九一三—一九二八—一九三二年に於ける社會保險の給付高

(絶對額及び總支出に對する百分率)

\*單位百萬馬

	一九一三	一九二八	一九二九	一九三〇	一九三一	一九三二
疾病	五〇六・一 八八・九	一八九二・九 九二・三	二〇四九・九 九六・七	一八三四・一 九一・二	一四九三・一 八九・六	二〇七二・一 八八・〇
傷害	一七九・四 七八・八	三二一・八 八五・一	三九八・八 八五・一	三六四・八 八五・一	三五七・六 八五・一	二八一・七 八四・七
癩疾	二八・三 八九・七	一〇七・一 九五・〇	一二六・九 五五・二	一四〇九・四 九五・五	一四九二・二 九五・三	一二三・五 九四・二
使用人	一一・三 七六・九	二四・〇 八九・八	一六八・八 九七・七	二二〇・七 九三・六	二四九・三 九四・七	二五・五 九五・三
鑛夫	四・九 九三・八	二六・六 九五・四	二二〇・九 九五・二	二二九・五 九五・八	二二三・〇 九四・二	一八八・一 九三・五
總計	九五九・〇 八七・二	三七五・四 九五・〇	四〇五・三 九六・六	四〇八・五 九二・四	三七二・二 九一・八	三〇六・九 九一・〇

最後の總計によりて全保險の大勢を概觀せう。戰前には總給付高約九億六千萬馬なりしが、ナ

ナチス革命前には一九二九年の四十億五千萬馬を最高とし、最低は三二年の三十億、五ヶ年平均が年額約三十七億二千萬馬である。而してその總支出に對する給付總額の百分率をみるに、一九一三年は八七・二%なりしが、革命前には毎年九一%を凌駕してゐて、平均すれば九二・六%に及ぶ。而して一九二九年を山としてそれ以前は遞増しその後は遞下してゐる。それは經濟不況の深刻化につれて保險收入が減じ、ために保險の支出も抑へざるをえなくなつたのであるが、行政費などが比較的減率の少きために、自ら給付高を割合に多く減じて行つたことを物語るものである。

今翻つて各保險別にみると、ナチス革命直前の一九三二年に於ける各給付高は癱疾保險の十二億馬を最高とし疾病保險の十億馬これに亞ぐ。傷害・使用人・鑛夫保險は遙かに下りて約二億馬内外である。癱疾・疾病保險の給付高が同年に於ける總給付高の約八〇%を占めてゐる。この二保險の給付額の他の保險のそれに比して大なるは獨り三二年のみならず凡ての年に共通してゐることである。さてその總支出に對する給付高の百分率をみるに、殆ど全保險が一九二九年或は三〇年を山としてそれ以來は減退してゐる。唯獨り使用人保險のみが例外をなし、逐年その額のみならず百分率をも増加してゐる。絶對額の増加は財産状態がよいので利子收入の大なるによる。百分率の増加は給付絶對額の増加してゐるにもかゝはらず。次表でみる如く行政費の率がかへつて遞減してゐるによる。兎に角、使用人保險を除けば、大體に於て一九三〇年まで増加の傾向にありし保險給付高が不況のために一大節減を餘儀なくされて、その絶對額が三一年頃から著しく減

じたこと、並びにその總支出に對する百分率が逐年遞下してゐることは逸すべからざる重要な事實である。給付高の割合の減少は支出中の他の重要費用即ち行政費と大なる關係あるが故に、吾人は一轉して眼を行政費にむけやう。

第六表 一九一三—一九二八—三二年の社會保險に於ける行政費の地位  
 (絶對額及總支出に對する百分率) \* 單位百萬馬

	一九一三	一九二八	一九二九	一九三〇	一九三一	一九三二
疾病	五三、五 九、一	一四、八 六、九	一五、一 七、一	一六、三 八、一	一五、八 九、五	一三、三 一〇、八
傷害	二六、六 二、九	五、二 三、五	五、四 一、三	五、八 一、三	五、四 一、三	四、六 一、四
癩疾	二四、四 九、九	五、二 四、六	五、〇 四、一	六、九 四、二	六、一 三、二	五、三 四、四
使用人	二、九 一、七	二、三 八、二	二、一 六、五	二、九 五、七	二、七 五、二	二、〇 四、五
礦夫	二、三 四、九	九、三 四、一	九、五 四、一	九、六 四、〇	一〇、一 四、四	二〇、六 五、三
總計	一〇八、七 九、八	二五、八 六、七	二八、一 六、五	三〇、一 七、〇	三〇、九 七、四	二五、八 七、八

全社會保險の行政費の支出總額に於ける地位は、戦前は九・八%にして、ナチス革命前の五ヶ年をみれば、一九二八年が六・七%、次年には六・五%に下つたが、更にそれ以後は逐年遞増して來た。之を絶對額に徴すれば、戦前は約一億馬なりしが、革命前には二三億臺に上り、五ヶ年平均二億八千萬馬となる。五ヶ年間の變遷をみるに一九三〇年の三億五百萬馬を最高とし最低は同

三二年の約二億五千萬馬である。一九三〇年を山としてそれ以前は増加しその以後は遞下してゐる。これは經濟不況のために保險收入が減じ、從つて又その支出即ち給付高も減少し、行政費も亦節減せられざるをえなくなるによる。然るに茲に注意すべきことは、行政費が絶對的には減じてゐるが、相對的には減じてゐない。否、一九二九年以來逐年遞増してゐることである。而して今この行政費の百分率を前表給付高の百分率と比較するならば、吾人は次の如き事實を知る。即ち大體に於て保險行政費の率の増加してゐる年は保險給付高の割合が減じてゐる。別言すれば保險給付高は行政費のために逐年その割を減ぜられてゐるといふことになる。これは何を語るか保險の行政費が給付高の減少につれて同率に減少しえない性質のものであるか、或は又減少するものであるが減少しえなかつたのであるか、或は二つの右の理由の結合のためであるか、吾人は茲にその論斷を下しえないのであるが、革命前に「社會政策の官僚化」といふ非難が獨逸に行はれてゐたが、右の事實は或はその非難を統計的には反映してゐるのかも知れぬ。以上は總保險に就て述べたのであるが、個別的にみても大體同様であつて、各社會保險に於ける行政費はその率を遞増してゐる。使用人保險が例外をなすことは先にも觸れし所なるが、察するにその理由は、使用人保險の經營は他の疾病や癱疾その他の保險に比して物件費も少く、被保險者も比較的少きが故に人件費も亦少くてすむるためであらう。



## (丁) 結言

吾人は以上に於てナチス革命前の社會保險の財政狀態を概説した。それを要括するに、全社會保險に就て之をいへば、收支關係は逐年惡化し、革命の二三年前は各保險に於て赤字頻出の狀態である。財産の積立は増加するよりも停止、否、寧ろ大勢からみて減少の傾向にありしといふべく、從つて利子その他の財産收入には更に期待をかけなくなつてゐる。總收入中樞的地位を占める負擔金收入の絶對額も相對額も共に逐年低下する一方であり、之に反して國家の財政負擔は逐年増加するばかりである。更に轉じて支出方面を窺へば、被保險者への給付額は不況のために減少すると共に、その總支出に對する百分率も亦逐年減少してゐる。然るに他方行政費はその絶對額に於ては逐年減少してゐるが、相對額に於ては逐年遞増してゐるのである。以上收入・支出何れの方面をみても社會保險の經營に明みはなくなり、行詰り・破綻といふ感を深うせしめられる事實のみである。しかもその惡化は一九三〇年以來急激にその程度を増してゐる。ナチス革命の直前だけに吾人に多くの興味と示唆を與へるものがある。さて社會政策として社會保險の狀態はかくの如くに立ち至つた。獨逸に於ける社會事業或は政策としては他に尙給助・救護の制度がある。これ等は要する費用は國家財政にとりて如何程の負擔であつたらうか、以下吾人はこれが檢討に移らう。

## 第二、給助及び救護費

給助及び救護の意義に就ては吾人はかつて述べたから詳細は茲に繰り返さぬが、前者は戦時負傷者及び戦死者の遺族に對する救助であり、後者は少額の年金生活者や社會保險の年金受領者及び他の社會的・經濟的要救護者の救護である。

(甲) 救助費 國庫負擔にかゝる給助費は第七表之を示す。

第七表 一九一三・一九二八・三二に於ける給助に對する國庫負擔額 (單位百萬馬)

給助額 行政費 合計	一九一三	一九二八	一九二九	一九三〇	一九三一	一九三二
給助額	—	一七五・三	一六七・一	一六〇・一	一七〇・三	二八九・六
行政費	—	七・七	七・八	七・五	五・五	五・五
合計	二九・七	一八三・〇	一七五・九	一六七・六	一七五・八	二四二・一
右百分率						
給助額	—	九六・〇	九六・六	九八・八	九五・九	九五・六
行政費	—	四・〇	四・四	四・二	四・一	四・四
合計	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇

【註】 右表の「給助額」は軍人の戦傷者や遺族に對する給助のみでなく、戦争に關聯して失職退職した官吏への給助も含まれてゐる。これは社會事業としての給助からは除くべきである。併し茲では之を除かずそのまゝに掲げてある。その理由は給助額と共に給助制度の行政費をもみたいのであるが、その行政費はそれら總ての給助に對するものであつて、これを分ちえないこと及びそれらの額が固有の給助額に對して僅に二%内外の少額にすぎるために、固有の給助費の大勢をみるにはさしたる影響なしと考へらるゝによる。更に又統計掲ぐる給助額から恩給は除かるべきである。蓋し恩給は救済費に非るが故である。しかし恩給額を統計上知ることが出來ぬ。よりてこれもそのまゝにしてある。ビュロー氏は恩給を控除して戦時犠牲者への給助費を

一九二四	一九二五	一九二六	一九二七	一九二八	一九二九	一九三〇
約1100,0	1117,9	1150,9	1130,5	1174,9	約1200,0	約1100,0

としてゐる。<sup>3)</sup>(單位百萬馬)一九二八年に於て私の統計と決算上の比較がなしうる。氏の一九二九・三〇年の數字は見積りであるが故に正しき比較とはならぬ。

給助費は右表の示す如く戦前には約三千萬馬足らずに過ぎざりしが、一九二八年には十八億馬を示してゐる。それは逐年減少してゐるがそれには理由がある。既に述べし如く給助は主として戦傷者並に戦死者の遺族に與ふるものなるが、國家財政の窮乏につれて次第に受給者を減じていつたことがその理由の一つである。即ち一九二〇年の始めには受給戦傷者數約百五十萬人なりしが生業能力喪失約一〇%以下のものを除きし爲に百二十七萬五千人に減じ、更に一九二三年には生業能力二〇%以下のものを除きしたために更に減じて、一九二四年には七十二萬人となつた。其後も恐らく同様の政策が續けられたものであらう。次に給助をうくる戦死者の遺族をみると、一九二四年の調査によれば、百五十九萬七千三百五十人であるが、これも漸減して行く性質のものである。蓋し給助をうくる遺族の中、一九二四年の調査によれば六四・六%までが孤兒であり、一二・一%は戦死者の親であるが、前者は年々成長して生業能力を大ならしめてゆくものであり、後者は年々老衰して死亡してゆく様になるからである。何れをみても受給者の數が従つて又給助額が減じてゆくわけである。<sup>4)</sup>

3) 前掲、Bülow 氏の論文参照

4) 以上は E. Rawicz. Die deutsche Sozialpolitik im Spiegel der Statistik. S. 295. に據る

さて右の表をみるに、給助費の行政費の割合は大體四〇%程度であり、社會保險のそれに比すれば可なり低い、それは必ずしも減少の傾向を辿るとなし難く、一九三二年にはその率が又上つてゐる。社會保險費に比して給助費の著しい特徴は、前者は漸増の傾向が強かつたのに後者が漸減してゆくことである。それにして戦後二十數年を経て尙十億以上の給助額を負擔せねばならなかつたことは、窮乏化せる戦後の獨逸經濟にとりては決して小なる負擔ではない。

(乙)救護費 社會負擔の最後として國家の救護費を述べやう。獨逸統計年鑑の掲ぐる所に據れば、救護費には「救護及保險ソノ他」と「失業者救護」の二項がある。その經費の大きさをみる。

第八表 一九二八—三二年の國家救護費

(單位百萬馬)

	一九二八	一九二九	一九三〇	一九三一	一九三二
救護及保健ソノ他	七四、七	五七、七	八〇、一	八四、〇	八六、二
失業者救護	五七、四	六七、三	一〇三、一	一〇九、〇	九六、八
合 計	一三二、一	一二五、〇	一八三、二	一九三、〇	一八三、〇

先づ吾人の目を驚かすは第二項の失業者救護費の著しき膨脹とその額の大きいことである。一九二八年には五億七千萬馬なりしが三〇年には十億に上り三一年には十一億馬に垂んとし、財政の不如意から大節減を加へられると雖も三二年には尙九億馬を算する。ナチス革命の五ヶ年に年々平均して約九億三千万馬の支出をなしたことになる。獨逸に於ける失業救濟事業が如何に大なる國家事業であつたかを察するに足るであらう。この失業者救護費の中には失業保險への國家負擔

も含まれてゐる。このことは次の即ち第三の社會費總計に於て更に説明するであらう。

### 第三、社會費總計及び結言

吾人は社會保險から始めて給助費及び救護費に及び、大體獨逸の社會費を各個別に叙述した。最後に三者を併せた總社會費をみよう。獨逸の總社會費は既にかゝげし社會保險の總支出(第一表参照)と、國家給助費(第七表参照)及び國家救護費(第八表参照)で殆んど盡くされるのであるが、以上の總計に於て社會保險からは除かれてゐるが、その經費の一部が救護費の中に計上濟みとなつてゐる失業保險費の殘額を加へねばならぬ。<sup>(註)</sup>さうするとその總計は次表の如くなる。

【註】失業保險は序言に述べし如く、經營が失業救濟事業と合同さるゝに至り固有の會計を失つたのである。而してその合同會計の收入は(い)掛金即ち負擔金收入(ろ)「利子ソノ他」(は)失業保險に對する國家の負擔(に)國家の失業者救護費の四であるが、その中國庫の負擔にかゝる(は)と(に)は前掲第八表の國家救護費の中に計上され濟みのものである。されば右收入の中(い)と(ろ)の額はこれまで掲げられし諸表の中に未だ計上されてゐない。その額は次の如くである。(單位百萬馬)

	一九二八	一九二九	一九三〇	一九三一	一九三二
負擔金	八三、七	八六九、二	一〇六、七	一三九、三	一〇二、八
利子ソノ他	三六、一	二二、〇	七、〇	一	一
合計	八五、八	八九〇、二	一〇六、七	一三九、三	一〇二、八

次の第九表に失業保險費殘額とあるはこの合計である。因みに失業保險及び失業救濟の合同會計の收入狀態を示さう。

	一九二八	一九二九	一九三〇	一九三一	一九三二
總 收 入	八五、八	九五、七	一六五、九	一四一、〇	一六七、二
總 支 出	九四、七	一三三、二	一七九、九	一五〇、六	一八三、二
差 引	八、九一	三七、五一	一四、〇一	一九、〇一	一四、〇

以上によりて失業保險及失業救済の合同會計に於ける經費も二重にならざる様に計上されたわけである。經費額としては収入の外に年々の赤字をも斟酌すべきであるが、甲年度の赤字は乙年度の國家負擔で埋め合はせたものと考へられるので、二重計算を避ける意味でこれは計算外に置く。猶、人は失業保險及失業救済會計の總支出中から國家負擔額を控除すれば、未計算の失業保險費をえらるゝと考へるかも知れぬが、統計上、國家の失業者救済總額は判るが、この合同會計への救済支出額は不明なためにそれは行ひ難いのである。

第九表

一九二八—三二年に於ける獨逸の總社會費

(單位百萬馬)

	一九二八	一九二九	一九三〇	一九三一	一九三二
社會保險費	三九、九	四三、二	四七、九	四〇、九	三三、〇
國家給助費	一八、〇	一七、五	一七、一	一四、九	一四、〇
國家救済費	六四、一	七、〇	一〇、七	一八、〇	一〇、五
失業保險費殘額	八五、八	八九、二	一〇、八	一三、三	一〇、八
合 計	七三、八	七五、四	八二、三	八〇、五	六五、九
單位十億	七、二	七、七	八、二	八、〇	六、五

さてナチス革命前の五年間の獨逸社會費は、一九二八年の七十二億三千萬馬を最低とし、三〇年には八十二億三千萬馬に上る。爾來その額は下り殊に三二年には激減を示してゐるが、五ヶ年間の平均額は七十五億七千萬馬である。右五ヶ年間の獨逸國家財政の普通會計は平均約七十三億八千萬馬となるが、更にそれより約二億馬ばかりも多いのである。社會政策・事業のために如何に莫大の國民所得が動員されてゐたかを知りうるであらう。更に右の額の中、國家負擔にかゝるものだけを計上せう。それは第四表の社會保險に對する負擔額と前表にある國家給助費及び救護費の合計である。今、それが如何に財政を壓迫してゐたかをみるために、財政上の經常歲出と比較する。

第十表 一九二八—一九二九年に於ける國家の經常歲出と國庫負擔にかゝる社會費（單位百萬馬）

	一九二八	一九二九	一九三〇	一九三一	一九三二
經常歲出	八三五・八	八〇四・二	八六二・六	六六四・八	五七五・一
國庫負擔の社會費	二八四・四	二九四・六	三三八・五	三〇九・五	二七四・九
右百分率	三三・六	三六・六	四〇・二	四六・八	四七・七

右みる如く、社會政策や事業のための國庫支出は、一九二八年が約二十八億馬、三〇年の約三十億馬を以て最高として爾來減少してゐるが、之を國家財政の經常の歲出に對する百分率からみると、一九二八年以來、三三・六%、三六・六%、四〇・二%、四六・八%、四七・七%と逐年増大してゐる。ナチス革命前の二三年にありては經常歲出の約半ばに垂んとしてゐる。社會費が如何

に國家財政を苦しめてゐたかといふことが判ると共に、國家財政の及ぶ限りを以て社會政策や事業のために努めてゐたことが察せられるのである。しかるにもかゝはらず、社會保險の經營は殆ど破綻に瀕し、又他の救護・給助費のために國庫そのものが破産せんとしてゐた。ナチスをまたずとも何らかの方法に於て、社會政策や事業に革命的刷新を企つるに非んば、到底從來のまゝにそれを繼續することが出来ない状態にあつたのである。ナチスが政權を握るや先づ社會政策に對する社會民主的なイデオロギ―を排撃して、國民社會主義的なイデオロギ―を以て之に代へつゝある。國民經濟や國家財政を苦しめつゝある社會費の莫大なる負擔から如何にして免れんとするか、の意圖と努力がそこに内在するはいふまでもない。そして理論家達にとりても社會政策とは抑も何であるかの再検討が旺んになつて來た。獨逸の經濟・財政を救ふためには、それは必然的な動向であるといはねばならぬ。(一一・一二四)